



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

ぼん子画

「B・Dプレゼント from マドンナ」

今年のB・D（バースデー）は不機嫌な気持ちで迎えることになった。

昨年はインドでB・Dで迎えた。ヒマラヤのガンジス源流（4,200m）に登頂し、麓に下りた日がB・Dであった。巡礼団リーダーの篤い配慮でケーキがひそかに準備されていた。40度を越える猛暑の時期にケーキを準備することは殆ど困難なことである。

今更ケーキや誕生日に一喜一憂する年齢ではないが、不覚にも涙を流してしまった。

（単なる感激だよ）

今年はどうだ。実に不愉快なB・Dではないか。

長年の友人家族が来日した。天理での翻訳作業と東大での講演のためである。彼はデリー大学教授で妻と娘を伴って来日した。わが輩には彼らを観光案内しなければならない義務がある。わが輩が病に倒れたとき愚妻と子どもたちがデリーにやって来たが、第一夜に泊まったのが彼らのところである。

しかるに愚妻は忙しいといって案内を躊躇した。（若干の誤解もあったようだが）それでわが輩は不機嫌になった。

薬物依存症を克服した人が営むラーメン屋があるそうで、そこに行くというのだ。

「美味しいんやて」

愚妻のことばを聞いたとき、わが輩の不快感は極点に達した。

(ラーメン屋ならいつでも行けるじゃないか！ 沈黙の抗議)

このような事情で重い気持ちを引きずりながら帰宅すると、配達日指定の小さな宅急便が届いていた。

「マドンナからだ！」

マドンナはわが輩の学友（哲学専攻）である。六・七人のグループで学びも行動も共にしていた。彼女をマドンナと呼ぶのは、わが輩を除いて、全員が恋心を抱いていたからである。知的で成績優秀な人であった。ちなみにわが輩より「優」が十も多かった。

四月に同窓会があり、大阪名物「豚まん」を持参したので、その返礼かと思うのだが、何よりも嬉しいのはわが輩の誕生日を覚えていてくれたことである。

箱のフタを開けたら、美味しそうな銀座のクッキーが溢れ出てきた。わが輩は仕合せ者だと感じた次第である。古くからの友達がこの「仕合せ」を支えてきた。〈“幸せ”ではなく“仕合せ”である〉

同じ日にもう一つ届いていたものがあった。インドのマドンナからの手紙である。マドンナというのは冗談で、今は亡き友人の妹ハンナ（聖母マリアの母の名前）からのものである。

四十年ほど前に精神的ダメージを受けたわが輩を支えてくれたのが、彼女のファミリーである。彼らはクリスチャンで「エホバの証人」に属している。この教団は明治時代に米国で始まった。彼らがどのようにクリスチャンに改宗したか知らない。三女

がカソリック教徒と恋愛結婚したとき、彼らは教会の結婚式に行かなかった。「宗派が違うから」と言ったのが印象に残っている。

輸血の問題、カルトという指摘もあるが、わが輩の小学校と大学のまじめな友人二人が入信している。日本とインドの教団の印象は、どうも違うように思えてならない。インドにはない熱心な戸別訪問による布教か。いいや、それだけではない。その違和感は、おそらく“カースト”に根差すものだと思える。

父母が亡くなり、友人の兄が亡くなり、妹が亡くなった。ハンナー一人になった。わが輩を癒してくれた母親が亡くなったとき、ご遺体の写真を送ってきた。

「大魔王よ。助けて。血糖値が 537mg/dl になった。経済的危機に直面している」

わが輩は常々言っていた。困ったときは知らせておいでと。

すぐさま生活治療費を送った。手続きをすませたあと、「仕合せ」を感じた。わが輩は人が思うほど裕福ではない。わが家庭があるから「仕合せ」なのではない。なにか「恩」というような重いものではなく、「借り」を返せたから仕合せと感じたのであろうか。

いいや、何となく違う。たぶん、このような人たちに囲まれていたこと、それをあらためて知ったことが「仕合せ」の源泉だと思える。

ああ、なんと嬉しいことか、今年のビッグ・プレゼントよ。

追記

この原稿を下読みしたわがミトラ城スタッフぼん子が言った。

「あれれ？ 私と肉丸がプレゼントしたネクタイのことが書かれていないわ」

ご免なさい。感謝してます！

「あれで首を絞めるために贈ったのに・・・」

おーMy ゴッド！

愛読者諸氏にお詫び

佳境に入りかけた連作「満月四人組デカン高原の旅」を一ヶ月延期させて頂きました。誕生日というテーマなので、タイムリーな方がよいと判断したからです。次号「満月四人組デカン高原の旅」をご期待下さい。